

復活の主日

2013.3.31

ヨハネ 20・1-9

ご復活祭おめでとうございます。復活祭を迎えて、教会の典礼の中では、昨夜の復活徹夜祭からアレルヤの喜びの歌声が響いています。

アレルヤというこの喜びの歌は、旧約の詩篇の中に大きなうねりとなって響いている、神をほめたたえる賛美の叫びです。アレルヤとは、「主を喜びたたえよ」「主をほめたたえよ」という神を信じる者たちの、最も純粋な、喜びに満ちた信仰の叫びです。けれども、アレルヤというこの喜びに満ちた賛美の歌声は、詩篇 150 編の全体を見渡すと、その最後の部分に集中的に収録されていることが分かります。詩篇 150 編の全体は、むしろ、神を信じて生きるということは、神がお与えになった掟に従って歩むことであり、それが真の幸せへの道であることを論ずる教訓を目的にした歌であったり、神を信じて生きる者たちがこの人の世で経験するさまざまな苦しみの中から、神に訴えかける嘆きの祈りに満ちています。この人の世にあって、あれほど痛切な嘆きを神に訴えた人々が、どうして、これほどの純粋な歓喜に満ちた神をほめたたえる信仰の歌を歌うことが出来たのか、詩篇全体を通して味わう時、神を信じて生きた人々の心の振幅の大きさに圧倒される思いがします。

アレルヤの喜びの歌が響く今日の復活祭のミサの福音の中には、しかし、どこを探しても、アレルヤの喜びの気配は感じられません。そこに語られていることは、イエスの遺体を納めた墓のぼっかり開いた空虚さと、その墓の前で右往左往する弟子たちの姿だけです。イエスの復活を語る福音書の記述がこのように始まることに、私たちはもっと注意を向けなければなりません。イエスがそこにおられない、黒々と開かれた墓の入り口に立ち尽くす弟子たちの姿は、私たち自身の姿でもあるかのようです。

イエスがそこにおられない墓の前で右往左往する弟子たちの姿と重なるような日々を生きている私たちが、アレルヤの歌声の中に身を置くことが出来たのは、今年もこうして、復活祭のミサに参加することが出来たからです。

「主をほめたたえよ・アレルヤ」という、復活祭に歌われる歓喜の歌は、あの墓の前に佇んだ弟子たちにとってそうであったように、私たちの中から生まれ出たものではありません。ここに響くアレルヤの歌は、十字架に架けられて死に、墓に葬られたイエスが、そのおことばどおりに復活されたことを告げるキリスト教の信仰を受け入れた者たちが歌う、信仰によって知ることが出来た

歓喜に満ちた信仰の喜びを歌う歌です。空になったイエスの墓の前に佇む弟子たちのように、嘆きに包まれた日々を生きてきた私たちが、神をたたえるこの歓喜の歌をささげることが出来るのは、主イエス・キリストの復活を告げる教会の信仰を受け入れることが出来たからです。私たちは、教会が告げる主イエス・キリストの復活を信じるカトリック信者として、その教会の懐の中で、私たちの主イエス・キリストの復活をたたえて、このアレルヤの歌を歌うのです。私たちの日々がどのような嘆きに包まれていようとも、復活祭を迎えるたびに、私たちは、私たちのカトリック信者としての信仰がそこで与えられ、私たちのカトリック信者としての信仰を生きる日々がそこで支えられている教会にともに集って、この信仰の喜びの歌を歌うのです。

旧約の詩篇の中にあのような赤裸々な嘆きの歌を残した人々は、エルサレムの神殿に詣でて、そこで行われる祭儀の中に響くアレルヤの歌を聴いたのです。その祭儀の中に響くアレルヤの歌声と一つに溶け合うことによって、自分たちがあの嘆きの中で訴え続けた、イスラエルの主である神と出会うことができたのです。自分が苦悩の日々の中で、嘆き訴えていた神がどのようなお方であるのか、あらためて確認することが出来たのです。エルサレムの神殿で行われた祭儀は、天地万物の創造主である神、自分たちの祖先をその大いなる御力をもって、エジプトから導き出された神、シナイの山の燃える火の中から自分たちの祖先に語りかけ、自分たちをご自分の民としてくださった神、荒野の旅を導いて、自分たちを約束の地に導き入れて下さった神、エルサレムの聖なる神殿をご自分の栄光の住まいと定めてくださった神のみ前にぬかずいて、賛美のうちに礼拝する祭儀です。その祭儀の中で、人々はアレルヤの歌を歌ったのです。エルサレムの神殿の祭儀に与った人々は、神によって導かれた歴史を生き、祖先たちと一体となって、自分たちの歴史を導いておられる、自分たちの主である神をたたえてアレルヤの歌を歌ったのです。そのアレルヤの歌声に包まれることによって、神のみ前に参集した人々は、自分たちの嘆きを聴いてくださる神への信仰を新たにしましたのです。

私たちがカトリック信者として、私たちの信じる主イエス・キリストの復活をたたえて歌うアレルヤの歌は、詩篇の中にその歌声を響かせている人々の神への信仰の系譜に連なっているのです。私たちも、日々の生活の中ではアレルヤの歌を歌うことが出来ません。その日々の中で、私たちが神を信じる信仰者として祈るとすれば、それは嘆きの祈りにならざるを得ません。けれども、私たちの祈りが嘆きの祈りだけであるとするなら、その祈りによって、私たちは自分自身を支え続けることは出来なくなります。嘆きの訴えが聴きとどけられているとは思えない空しさの中で、私たちの神への信仰もいずれは破綻してし

まいかねません。そのような私たちはアレルヤの歌声を必要としているのです。

イエスをそこに見出すことが出来ない、今日の福音のあの墓の場面で、しかし、アレルヤの歌は確かに響いているのです。そのアレルヤの歌は、十字架の死を越えて復活された神の子イエス・キリストを迎えた父なる神のみもとで天使たちが歌うアレルヤの天の歌声です。父なる神のみもとで、天使たちが歌う天のアレルヤの歌声をこの私たちの世界にもたらすために、復活された私たちの主イエス・キリストは、弟子たちのもとにご自分を現してくださったのです。私たちは、その弟子たちの宣教から始まった教会が告げるイエス・キリストの復活を信じる信仰を受け入れて、その教会の中で、同じ信仰を生きる兄弟たちとともに、嘆きに包まれた日々の生活を生きながらも、私たちが信じる神をたたえてアレルヤの歌を歌うことが出来る者たちとなったのです。

神をたたえるアレルヤの歌が響く教会は、嘆きに包まれて生きる私たちの日々の中で、私たちの神への信仰を生き返らせる、私たちの信仰者としてのいのちのオアシスです。荒れ野の道を行く私たちのうちに、永遠のいのちへの希望を開くいのちの水辺です。

今年もこうして復活祭のミサとともに集うことが出来たことを神に感謝し、私たちのアレルヤの歌声を精一杯響かせたいと思います。私たちのアレルヤの歌声が神に受け入れられ、嘆きに包まれたこの世界に生きる人々の心にも届くものとなるよう、私たちが信じる、墓の闇を開いて復活された全ての人の救い主の復活をたたえて、力の限りアレルヤ歌を歌いたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高